
天国からの贈り物

松の慎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天国からの贈り物

【Nコード】

N1467B

【作者名】

松の慎

【あらすじ】

あれはきつと天国にいるあなたからの贈り物。優しさゆえに死んでしまった彼を、あたしは決して忘れない……。切ない感動ラブストーリー。

愛しい人を一生愛したいって思う。
それは叶わぬ願いなのですか？

「華、終わった？」

「うん！帰ろー」

今日は久しぶりに彼氏と帰ることになった。
あたしと涼の部活の時間帯とかが違うせいで、あんまり一緒に帰れないからこういう日はすっごく楽しみなんだ。

「公園でも寄ってかない？」

「公園？」

あたしは涼を誘う。

少しでも一緒にいる時間を増やしたかった。

公園に入ると、小さな子たちが楽しそうに遊具で遊んでいる。
近くのベンチに腰をかける。

「わーもう寒い時期だねー手先が凍えるー」

「もう11月だしな」

すると、涼はいきなり席を立つ。

「なんか飲み物買ってくるよ。なにが良い？」

「あ、じゃあホットミルク」

「おっけー」

大好きな涼。

優しくて、困ったときとかいつも励ましてくれる。
そんなところが好き。

ずっと一緒にいたいって思う。
それはあたしだけ？

「はい」

「ありがとー」

涼がベンチに座る。

2人で温かい飲み物を飲む。

「・・・ねー涼」

「ん？」

「ずっと、ずっと一緒にいたら良いね」

まだ高校生だけど、この先なにがあるかわからないけど
だけどきつと思いは変わらないって信じてる。

「いようよ」

冷たい風がびゅうつと吹く。
肩が震えた。

「ずっと一緒に。俺は華しか考えられないな」
「涼・・・うん、そうだね」

高2の冬になりかけている11月。

あたしたちは永遠の約束をした。

それが叶わないとは、少しも思っていなかった。

それから何十分経っただろうか。

たくさん話して、日も落ちて寒さに耐えられなくなった頃、あたしたちは立ち上がった。

「帰ろっか」

公園を出る。

すると、あたしたちの横を走って駆け抜けていく小さな女の子が見えた。

「なに？」

よく見ると、その子はボールを追いかけている。
もうすぐそこは道路。

「おいっ……！」

涼はすぐに駆けだした。

道路にまで出てボールを拾おうとしてる女の子のもとへ。

「涼っ！あぶなっ……」

キキィーッ………ドンッ。

遅かった。

「涼ーっ！！！！」

あたしはすぐに涼のもとへ駆け寄った。

涼はあたしの方を見て、息を切らしながら言った。

「お・・・んなの子は？」

「あ・・・無事！無事だよ！」

女の子は側で泣いている。

けれど、どこもケガはしていないようだった。

「涼、しっかりして！」

「大丈夫だって・・・んな顔すんなって」

涙が溢れる。

だって、こんなに血が出てて大丈夫なわけがない。

「誰かつ・・・誰か救急車を呼んで！誰かつ！！！！」

周りにいる人が、携帯を取り出して連絡する。

それを確認して、あたしは涼の手を握る。

「涼っ・・・お願い、死なないで」

涼の手に涙がポタポタと落ちる。

「泣かないで、華・・・」

苦しいはずなのに、痛いはずなのに、辛いはずなのに
涼はあたしのために笑った。

「涼っ……」

死なないで。

どうか、どうか生きて。

それ一心で、願う。

「泣くな……華。俺……華の笑った顔が好きなんだ」

「涼……」

どうして？

どうしてこんなときまであたしを気遣うの？

「約束、守れなくて……ごめん」

「涼？涼っ？！いやぁーっ涼ーーーーっ！！！！」

それっきり、涼が目を開けることはなかった。

あたしはもう動かない涼の手を強く握りしめ、涼の名前を叫び続けた。

数分後、救急車と警察が来た。

もう、遅いけれど、涼を救急車に乗せる。

あたしも一緒に乗った。

警察は、車の運転手に事情聴取をしている。

「運転手さんは……悪くないです。女の子が飛び出して、それを彼が助けた……だけ」

「そうですか」

あたしは警察官にそう言い、救急車に乗り込む。
救急車が走り出す。

あたしは心の中で葛藤する。

どうして人間はこんなにも脆いの。

どうしてこうも簡単に人は死んでしまうの。

神様は不公平ですか。

どうして涼が死ななくちゃいけなかったの？

こんな優しい人、どうして生きていられなかったの？

涼の優しさと勇敢さが・・・涼の命を奪った。
なんて皮肉なの。

「華ー今日は部活どうする？」

「んー・・・」

あれから1週間が経つ。

葬式も行われて、もちろんあたしも参加した。

けれど、あたしは未だに立ち直れていなかった。

「そろそろ元気になりなよ」

友達はみんな心配してくれる。

けれど、どうしても笑う気分になんかとてもなれない。

いつも窓の外を眺めるだけ。

「涼くんだってそんな華を見たいはずないよ」

「無理。無理だよ・・・涼がいないのに平然としてられるわけない

じゃん」

なんで？

なんでよ、涼。

もう隣で一緒に話することもできないの？

一緒にたわいもないことで笑って・・・

そんな簡単なことも、もうできないの？

「一緒にいようね、って・・・」

言ったのに。

言っただけだったのに。

♪♪♪

携帯が鳴る。

ふと携帯に目をやると、それはありえないはずの『寺岡涼』からの電話。

「も、もしもし？」

『あ、華ちゃん？涼の母です』
「あ・・・」

そうだよ、涼が出るわけない。

なにを来たいしてたんだろう・・・

『華ちゃんに渡したいものがあって・・・時間あるかしら』

「あ、はい。じゃあ今から行きますね」

『ええ、待ってるわ』

電話を切る。
荷物をまとめる。

「瞳、あたしちょっと用事ができた」
「用事？」

「涼の・・・お母さんに呼ばれたの」
「そっか・・・じゃあ、休みって言っとくね」
「うん」

学校を出る。
急いで涼の家へと向かう。

胸がドキドキしつつ、インターホンを押す。
すぐにおばさんが出てきた。

「いらつしゃい、華ちゃん。どうぞあがって」
「あ、はい」

家へ入る。
案内されたのは、階段をあがってすぐある涼の部屋だった。
おばさんがドアを開けて、どうぞと言う。
あたしはおそるおそる足を踏み入れた。

涼の世界。

「あの子が使ってたままにしようって家族で決めたの。さっき掃除
してて見つかったんだけどね・・・」

おばさんが涼の勉強机の上にあるものをあたしに差し出した。

「これ、華ちゃんにだと思っの」

受け取って、中を見る。

あたしが前にほしがっていたピンクのチェックのマフラーだった。
カードがそえてある。

——誕生日おめでとう。これからもずっと一緒にいようね——

「あたしだって・・・忘れてたのに」

あと数日で誕生日。

じゃあずっと前から用意してくれてたってことなんだね。

「涼・・・」

涙が落ちる。

涼の温かさがすごく伝わってきた。

ああ、あたし愛されてた・・・って。

「華ちゃん。この子きつと幸せだったと思う。だからどうか華ちゃんも幸せになってね」

「涼と一緒にいる以上の幸せなんてありませんよ」

マフラーをぎゅっと握りしめる。

「けど・・・涼の分まで、頑張って生きます」

涼、最後に約束守れなくてごめんって言ったよね。
でもあたしの心の中では永遠に居続けるよ。

きつと上から見守ってくれてるんでしょ？
きつとあたしが困ってるとき、手を差し伸べてくれるはず。

涼が最後の最後まであたしのことを考えてくれてたのに、あたし涼
がいないことでいっぱいになってた。
けど、それじゃだめだよな。

——俺、華の笑った顔が好きなんだ——

うん。

あたしも涼の笑った顔大好きだった。

見ててね。

あたしこれから頑張るよ。

もう下向かないし、心を閉ざしたりしない。

涼が好きだって言ってくれた英顔でありたいから。

「ありがとう、涼」

高2の冬間近、あたしは君という光を見た。

f i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1467b/>

天国からの贈り物

2010年11月21日14時34分発行